

江戸・東京の祭礼文化

—江戸天王祭を中心に—

岸 川 雅 範

はじめに

江戸時代の江戸において、二月から九月にかけて神輿あ
るいは山車や附祭を出す祭礼が多く行われた。二、四月に
各稲荷祭礼、三月に浅草三社権現祭礼（三社祭）、六月に各
天王祭はじめ山王祭、赤坂氷川明神祭礼、佃島住吉明神祭
礼、八月に各八幡宮祭礼、各天満宮祭礼、九月に神田祭な
どが行われたが、中でも六月には特に多くの祭礼が行われ
た。その中でも特に目立つ祭礼が天王祭であった（表1参
照）。

江戸における天王祭は『江戸名所図会』や『東都歳事
記』⁽¹⁾などの記録によると、小柄原牛頭天王（現・素盞雄神社、
荒川区千住町に鎮座）、神田明神末社・牛頭天王三社（現・神
田神社摂社・大伝馬町八雲神社、江戸神社、小舟町八雲神社、千
代田区外神田に鎮座）、品川牛頭天王（現・品川神社相殿、品

川区北品川に鎮座）、浅草御蔵前牛頭天王（現・浅草須賀神社、
台東区浅草橋に鎮座）、橋場牛頭天王（現・石浜神社摂社・江
戸神社、荒川区南千住に鎮座）、四谷天王稲荷（現・四谷須賀
神社、新宿区須賀町に鎮座）などの天王祭があり、荒々しく
神輿を担ぐ祭礼が多かった。

中でも最大の規模を誇ったのが、神田明神境内に祀られ
る末社（後に摂社）・牛頭天王三社の天王祭であった。

本稿では、江戸時代の天王祭を概観し、特に神田明神末
社・牛頭天王三社の天王祭―南伝馬町持牛頭天王、大伝馬
町持牛頭天王、小舟町持牛頭天王―を考察し、今に続く神
輿渡御の内容を明らかにする。さらに明治時代以降、これ
ら天王祭がどのような変遷を遂げていったかも明らかにす
る。その中でも特に目まぐるしく変転した南伝馬町持牛頭
天王社―明治以降は須賀神社さらに江戸神社と改称―を具
体的な事例とする。

表 1 江戸時代の神社祭礼一覧

祭礼月日	神社名	現社名	天保期	寛政期	文政期	享保 20 年 (綾江戸砂子温故名跡志)	備考
1 2 月午の日	毎日 日比谷稲荷	毎日 日比谷神社	神興、山車練物あり	寛政 4 年祭礼後、休み	神興渡御あり 天明 2 年祭礼後、休み 文政 8 年より 5 年間休み		
2 2 月初午	毎年 烏森稲荷	烏森神社	神興渡御あり 隔年で踊り練物あり	天明 4 年祭礼後、休み	神興渡御あり 寛政 6 年祭礼後、練物休み		
3 2 月初午	毎年 穀豊稲荷	穀豊稲荷神社	御旅出あり				
4 2 月初午	毎年 西ノ宮稲荷	浅草神社合祀	明和 9 年神興渡御	明和 9 年神興渡御後、神興大破により休み	記載なし		
5 2 月後午	毎年 下谷茅町境稲荷	境稲荷神社	宝暦 11 年まで神興、山車練物あり 宝暦 13 年、神興渡御のみ 安永 3 年より神興も出ず	宝暦 11 年まで山車練物あり 安永元年まで神興神渡御あり、以後いずれも休み	記載なし		
6 2 月 10 日	毎年 湯島天満宮	湯島天満宮	神興を社前にすえて行事あり				
1 3 月 11 日	毎年 下谷稲荷	下谷神社	寛政 3 年祭礼後、山車練物中絶 神興、神祭、鉦 2 本、四り 神牙、屋台に乗せた雄雄の狐、立花家・加藤家よりの長柄楯供奉あり	寛政 2 年祭礼後、中絶 神興獅子頭、武家方鐘あり 延引、その後、休み	文化 2 年祭礼は大火により		
2 3 月 18 日	毎年 浅草三社権現	浅草神社	神興、山車練物あり	安永 10 年祭礼後、官大破により休み	記載なし	神興渡御、山車練物あり	天保期に隔年
1 4 月初午日	隔年 筑地稲荷	波除稲荷神社	竜虎の頭を獅子頭のようにして町々を渡す	安永 2 年祭礼後、休み	記載なし		
2 4 月 15 日	毎年 山谷玉姫稲荷	玉姫稲荷神社	神興獅子頭渡御	獅子頭渡御	記載なし		
3 4 月 16 日	隔年 杉の森稲荷	唱森神社	隔年で練物を出すが、近年はなし	近宝暦 9 年祭礼後、休み	記載なし		
1 5 月 5 日	毎年 府中六所明神	大國魂神社	神興、御旅所へ神幸あり				

2	5月15日		沙千稲荷		杜前海ばたの仮屋に神興を遷す				
3	5月15日		金杉村三島明神	三島神社	神興渡御あり				
1	6月3日～9日	毎年	小柄原牛頭天王	素盞雄神社	神興渡御あり	神興渡御あり	記載なし	箕輪祭	
2	6月5日	毎年	浅草御門外第 六天神	榊神社	近年、山車練物は中絶 天保4年より神興渡御は 隔年あり	天明元年祭れまで山車練 物を出すか、神興大破に より休み	神興渡御、隔年執行 山車練物は近年休み		昔の祭れ月日は 2月9日
3	6月5日～8日	毎年	神田社地天王 二の宮（大伝馬町八雲馬町天王）	神田神社 神田神社 神田神社 馬町天王	神興渡御あり			神興渡御あり	
4	6月7日～14日	毎年	神田社地天王 一の宮（南伝馬町天王）	神田神社 江戸神社	神興渡御あり			神興渡御あり	
5	6月7～19日	毎年	品川牛頭天王	品川神社 相殿	神興渡御あり	—	記載なし	神興渡御あり	
6	6月8日	毎年	浅草御蔵前牛頭天王	浅草須賀神社	神興渡御あり	神興渡御あり	記載なし		
7	6月9日	毎年	浅草鳥越明神	鳥越神社	寛政8年祭れ後、山車練 物中絶	明和5年祭れ後、休み 寛政8年祭れ後、休み	隔年6月9日執行 神興渡御があるが、類焼 により度々休み	山車練物あり	
8	6月10日～13日	毎年	神田社地天王 三の宮（小舟小舟町八雲神町天王）	神田神社 神田神社 社	神興渡御あり			神興渡御あり	
9	6月13、14日	毎年	亀戸香取太神 宮	亀戸香取神社	神興獅子頭渡御あり				
10	6月15日	隔年	永田馬場日吉 山王権現社	日枝神社	神興、山車、練物、御雇 祭あり				
11	6月15日	隔年	赤坂氷川明神	氷川神社	神興、山車練物あり			神興渡御あり	
12	6月15日	毎年	橋場牛頭天王	石浜神社	神興渡御、船渡御あり	幟、提灯	神興渡御あり	山車練物あり	

13	6月15日	毎年	山谷熱田明神	熱田神社 (新鳥越)	宝暦13年祭礼後、山車練物中絶	宝暦13年祭礼後、休み	宝暦13年祭礼後、山車練物あり	隔年で渡祭礼あり	
14	6月15日		隅田川水神社	隅田川神社	神興、船渡御あり			毎年、神興渡御あり	
15	6月15日		六郷八幡宮	六郷神社	神興渡御、四神日月の矛飾鉾等出る				
16	6月13日 ～16日		河崎山王権現	稲毛神社	神興渡御あり				
17	6月18日 ～21日	毎年	四谷天王稲荷	四谷須賀神社	毎年、神興獅子頭渡御あり	天明元年祭礼後、休み	天明元年祭礼後、休み	神興、練物等あり	山車練物あり
18	6月25日	隔年	大窪天満宮	西向天神社	—	記載なし	記載なし		山車練物あり
19	6月28日	隔年	佃島住吉明神	住吉神社	神興を海中に担ぎ入れる	神興渡御あり	記載なし		
1	7月27日	毎年	日暮里諏訪明神	諏訪神社	神興渡御あり	神興渡御あり	記載なし		
1	8月15日	隔年	富賀岡八幡宮	富岡八幡宮	文化4年祭礼後、中絶	寛政7年祭礼で山車練物あり	文化4年祭礼後、見分(?)		山車練物あり
2	8月15日	隔年	三田八幡宮	御田八幡神社	—	寛政7年祭礼後、休み	文化元年頃より休み		
3	8月13日 ～15日	隔年	西ノ久保八幡宮	西久保八幡神社	神興渡御あり	寛政8年祭礼あり			山車練物あり
4	8月15日	隔年	市谷八幡宮	市谷龜岡八幡宮	隔年で踊り練物を出す	安永3年祭礼後、休み	安永3年祭礼後、氏子困窮により休み		山車練物あり
5	8月15日	隔年	高田穴八幡宮	穴八幡宮	宝暦9年祭礼後、中絶	明和8年祭礼後、休み	記載なし		山車練物あり
6	8月15日	隔年	今戸八幡宮	今戸神社	神興渡御あり	神興獅子頭渡御あり			
7	8月15日	隔年	田町八幡宮						山車練物あり
8	8月15日	隔年	渋谷八幡宮						
9	8月17日	隔年	麻布一本松氷川神社	氷川神社	神興渡御、踊り練物花出しあり	寛政3年祭礼後、休み	天明年中、宮その他再建	天明年中まで祭日は9月17日	
10	8月19日 (9月19日)	毎年	下谷坂本小野小野照崎神社	照崎明神	神興渡御あり	宝暦7年祭礼後、山車練物中絶	神興渡御あり		9月19日 山車練物あり
11	8月24日	隔年	亀戸天満宮	亀戸天神社	近年、神幸の儀なし	近々、神幸の儀なし	安永7年祭礼後、宮修復等により休み		天明4年に祭日が9月19日より8月に変更

1	9月10日	隔年	小石川氷川明神	氷川神社	近來中絶	明和6年祭礼後、宮修復により休み	当時、休み		
2	9月15日	隔年	神田明神	神田神社	神興、山車、練物、御雇祭あり				
3	9月15日	毎年	牛ノ御前王子権現	牛島神社	文政10年祭礼後、神興渡御なし 安永8年より山車練物なし	安永8年祭礼後、宮修復等により休み	記載なし	山車練物あり	
4	9月15日	毎年	下谷金堀村三島明神	三島神社	神興渡御あり	神興渡御あり	記載なし		5月15日も神興渡御あり
5	9月15日		千住掃部鎮守氷川明神	千住仲町氷川神社	昨今、神興2基、山車、練物、踊等出る				
6	9月16日	隔年	駒込神明宮	天祖神社	享保元文頃まで渡祭あり	宝暦9年祭礼後、休み	記載なし		
7	9月19日	隔年	牛込赤城明神	赤城神社	宝暦9年より中絶 神興渡御あり	山車練物あり 山車、提灯	神興渡御あり	山車練物あり	
8	9月20日	毎年	真(待)乳山天宮	待乳山聖天	安永3年本祭あり	安永3年祭礼後、休み	記載なし		
9	9月21日	隔年	小石川白山権現	白山神社	安永3年祭礼後、山車練物中絶 神興渡御あり	安永3年祭礼後、宮修復等により休み	明暦から宝暦まで休み 享和2年渡祭あり	山車練物あり	
10	9月21日	隔年	根津権現	根津神社	神興、獅子頭、棒等の渡御あり	寛政7年祭礼後、中絶 神興渡御あり	記載なし		
11	9月21日	隔年	青山原宿町熊野権現	青山熊野神社	年により山車練物が出る	寛政7年祭礼あり	神興渡御あり		
12	9月21日	毎年	下谷千束稻荷	千束稻荷神社	—	神興渡御あり	記載なし		
13	9月27日	隔年	千駄ヶ谷八幡宮	—	—	神興渡御あり	記載なし		

※ 天保期は『東都歳事記』1～3(斎藤月岑、朝食治彦校注、平凡社、昭和45年～47年)、寛政期は『類集撰要』32(『東京市史稿』産業篇第41、東京都、平成9年)、文政期は『御府内備考続編』(『東京都神社史料』第1輯、東京都神社庁、昭和41年)を参照。

一、江戸時代の牛頭天王社と天王祭

『江戸名所図会』や『東都歳事記』に江戸の天王社は、小柄原牛頭天王社、神田明神末社・牛頭天王三社、品川牛頭天王社、橋場牛頭天王社、浅草御蔵前牛頭天王社、四谷天王稻荷社などが見られる。そしてそれぞれの天王社において天王祭が行われた。

小柄原牛頭天王社は、比較的古い地誌・菊岡沾涼『江戸砂子温故名跡誌』（享保十七年（一七三二）に「飛鳥社」⁽²⁾とあり、また飛鳥明神社、飛鳥権現牛頭天王合社、小塚原天王、箕輪の天王、千手の天王などと呼ばれた。社伝によると延暦年中（七八二〜八〇六）に比叡の黒珍師により大己貴命と事代主命を祀ったのがはじまりとい⁽³⁾う。

小柄原牛頭天王社の天王祭は、毎年六月三日から九日まで行われた。天文三年（一五三四、天文十年とも）六月三日、町屋の左石衛門が荒川から流れてきた神輿一基を得たことから、天王祭が始まったという。この祭礼では千住大橋の南詰に旅所が設けられ神輿が渡御した。⁽⁴⁾

品川牛頭天王社は、文治三年（一一八七）に安房国の洲崎明神（現・洲崎神社、千葉県館山市洲崎に鎮座）の祭神・天比理乃咩命の勧請にはじまるという。その後、後醍醐天皇の御代に二階堂道蘊が神威を感じ「吉瑞岡」と名付けて宇

賀魂の神像を奉納し稻荷社を建立した。さらにその後、神明、貴船、天王、東照宮を相殿に祀り、品川大明神と称された。一説に相殿の天王社は文明十年（一四七八）に太田道灌が勧請したとも伝えられている。⁽⁶⁾

品川牛頭天王社の天王祭は、毎年六月七から十九日まで十三日間行われ、東海寺清徳寺門前より御殿山、品川本宿などの氏子町々を巡行し御旅所に居興、十九日に北品川宿を渡御して帰社した。またみこし洗いと称して海中に渡御した南品川天王と中の橋（品川橋）で行き会ってから、それぞれの御旅所へ渡御した。⁽⁷⁾神輿及び神輿に取り付ける国常立尊と翁の御面は、慶長年中（一五九六〜一六一四）に徳川家康が関が原の戦いで戦勝を願い寄付したものであった。

浅草御蔵前牛頭天王社は、推古天皇九年（六〇一）以前あるいは天曆年中（九四七〜五七）の鎮座で、大倉前の総鎮守とされた。⁽⁸⁾浅草御蔵前牛頭天王社の天王祭は、毎年六月八日から九日まで行われた。まず六日に社前の往還に仮屋が設けられ神輿が遷され、八日早朝より氏子が笹に団子を付けて神前に奉納した。これを疫病除けのお守りとして人々が群集して取り合ったため、俗に団子天王と呼ばれた。神輿の他に神飾りと鉾、四神鉾が元旅籠町や猿屋町、福富町などの氏子町々を渡御し、九日に神社に帰社した。⁽⁹⁾

橋場牛頭天王社は朝日神明宮の末社で橋場の鎮守であつ

た。橋場牛頭天王社の天王祭は毎年六月十五日に行われ、神輿の船渡御もあつた。神輿昇が皆裸であつたところからはだか祭、氏子たちが神輿を担ぐときに一人として担ぎ棒に触らず肩のみで押し合いながら担いだため汐入のおしい祭りとも言われた。なお当社の神輿一基は天正十五年（二五八七）四月に山城の住人・高須美作という人物が作つたものであつたといふ。⁽¹⁰⁾

四谷天王稲荷社は、菊岡沾涼『江戸砂子温故名跡誌』では「牛頭天王社」⁽¹²⁾とあり、四谷天王稲荷、四谷牛頭天王、四谷天王稲荷両社、天王稲荷両社、稲荷天王合社などとも称された。当初は麴町十一丁目清水谷にあり、一ツ木村鎮守として稲荷社が祀られ宝蔵院が別当を勤めてきた。寛永十一年（一六三四）十二月に堀普請のため土地が召し上げられ、代地として四谷の現社地を与えられ同地へ遷つた。

同十五年に、江戸幕府が日本橋大伝馬町へ、島原の乱で昼夜人馬の御用につとめた褒美として四谷御門外明地大縄七四〇間を与え、そこに国役を補助する助馬役を勤める町として四谷伝馬町が成立した。大伝馬町の人々は、同町の産土神として祀ってきた神田明神の末社・牛頭天王社を四谷伝馬町にあつた里俗御飯屋横町辺に勧請し小祠を建立したところ町が繁昌していったため、同二十一年六月十八日に稲荷社の相殿へ遷座することになった。六月十八日当日、

神田明神社家・浦鬼刑部により遷座され、以後、神田明神の社家が兼務するようになった。これ以降、稲荷は鮫川橋権原鎮守、天王は四谷鎮守とされた。⁽¹³⁾

四谷天王稲荷の天王祭は、毎年六月十八日から二十一日まで行われた。十八日に神輿が神社より四谷伝馬町二丁目・御飯屋横町角に作られた御旅所へ渡御し、御旅所を発興して四谷伝馬町一丁目、御簗笥町、伊賀町などの氏子町々を巡りつつ、氏子の武家方である松平中務太輔、尾張徳川家、紀伊徳川家、松平佐渡守の各屋敷に設けられた物見を通り御旅所へ帰つた。御旅所が設けられた御飯屋横町は元々牛頭天王が祀られていた場所であつた。

天保十三年（一八四二）六月「神輿巡行道筋覚」によると、二十一日に御旅所より天王横丁坂下、鮫河橋谷町を通り、表町火の見下、御駕籠町坂上角まで行き元の道へ戻つた。さらに御駕籠町より表町を通り南町へ入り、南町、八軒町、仲町番屋前より永井門前、谷町を通り天王横丁坂下へ出て帰社した。⁽¹⁴⁾

牧田勲氏は、江戸の神社祭礼での神輿担ぎ（神輿昇）を「儀式型神輿昇」と「揉み合い型神輿昇」の二つに分類している。「儀式型神輿昇」は、天下祭（神田祭と山王祭）や根津権現祭礼、赤坂氷川明神祭礼などの大社において見られ、あらかじめ決められた特定の人々が白丁（白張）姿と

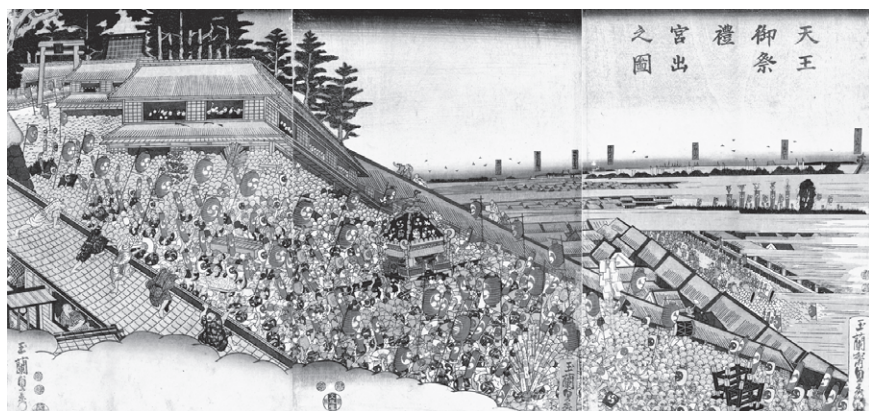


図1 『天王御祭礼宮出之図』歌川貞秀・画、江戸幕末期（神田神社蔵）

なり、神輿をゆすつたりすることなく肅々と巡行する担ぎ方であった。それに対して「揉み合い型神輿昇」は、橋場牛頭天王の天王祭など江戸の周縁部に位置する中小規模の神社において多く見られ、不特定多数の氏子たちを中心とした人々が、くだけた服装もしくは裸体で、荒々しく押し

合いへし合いする担ぎ方であったという。氏子たちが肩で神輿を担ぎ荒々しくもみ合う姿は、現代のもみ担ぎに通じる担ぎ方と言えよう。

牧田氏はこの型の神輿昇について、氏子たちが揉み合いの陶酔を楽しむ娯楽的な行為の性格が濃いと論じている。大社の祭礼に見られる各氏子町の山車や附祭は、中小級の神社の氏子町では資金を捻出することが困難であり、それ故、神輿へ注目することとなり、氏子町主導の下、多分に娯楽化された揉み合い型神輿昇が現れてきたのでであろうと推測している⁽¹⁵⁾。

その揉み合い型神輿昇の中で、最大の規模を誇ったのが神田明神境内に祀られる末社・牛頭天王三社の天王祭であった(図1)。この三社の天王祭について喜田川守貞『守貞謄稿』では以下のように記されている。

大伝馬町以下ともに、宮元の町と云ふ。このみやもと町内より夫を雇ひ、夫に烏帽子・白張を着せ、これを駕輿丁とす。しかれども神幸の諸町、壮年の男子は各争ひてこれを昇げば疫病を免ると云ひ、毎町名主・家主ら、上下を着し、一町限り供奉し、壮士らを制すれども、種々に興し昇きて、進行せざるを旨とし、やうやくに次町の境に至れば地に下ろし、先に昇きし壮士と次に昇く壮士と、手を拍ちて神輿を受授し、こ

れを昇ぐこと先のごとくなりしが、天保以来、官命ありて、近年ははなはだ興せず、速やかに次町に渡すことになりぬ。昔より、官吏も供奉して制すれども、あるひは、縛し、あるひは打擲等を憚りしが、近年は憚りなく縛をも用ふをもつて、神輿を淹留せず。

(中略)

神輿に宛りたる白張の夫は、かへつて空肩なるをもつて、前後に奔走し、路次の家々より擲ぐる処を、十二銅紙包みを得るを専務とせり。⁽¹⁶⁾

手を打ち神輿を授受する姿は、現代の神輿担ぎの一本締めや神輿の受け渡しを想像させる。⁽¹⁷⁾

二、神田明神末社・牛頭天王三社の天王祭

文政十年(一八二七)に書かれた「神田明神地誌調」(『寺社書上』)によると、牛頭天王三社の祭神は素戔鳴命で鎮座年月はじめ詳細は不明だが、元和二年(一六一六)に神田明神が江戸城内の旧跡地より湯島へ遷座した時に末社として一緒に遷ってきたとしている。⁽¹⁸⁾

祭神について、享保十三年(一七二八)六月七日に大岡越前守の御尋に対して、南伝馬町名主・高野新右衛門が以下のように答えている。

御神輿三社之内、本社南伝馬町、二ノ宮大伝馬町、三

ノ宮小船町与申伝候。壹ノ宮者素戔鳴尊、二ノ宮稲田姫命、三ノ宮山田大蛇、是を勧請致候与申儀二而御座候⁽¹⁹⁾(句読点は筆者による)

ちなみに斎藤月岑『江戸名所図会』では、素戔鳴尊(大政所、南伝馬町持)、五男三女(八王子、大伝馬町持)、奇稻田姫(本御前、小舟町持)としている。⁽²⁰⁾

牛頭天王三社はそれぞれ南伝馬町、大伝馬町、小舟町を中心とした氏子町により祀られた神社であった。小舟町持牛頭天王社は本来は小伝馬町持であった。これら牛頭天王社を崇敬した南伝馬町、大伝馬町、小伝馬町の三町は国役として伝馬役を課された町々であった。その起立について、各町名主連名により以下のとおり記されている。

三伝馬町起立尋

享保十一年八月十日樽屋藤左衛門殿より尋二付同
日左之通認差出候。

書付を以申上候

大伝馬町南伝馬町小伝馬町、右三ヶ所町始り之義御尋二御座候処、年久敷儀故聡と相知レ不_レ申候得共、
及_レ承候趣書付差上申候。

一、大伝馬町南伝馬町小伝馬町之儀、往古より馬次宿
二て御曲輪之内罷在候処、百式拾壹年以前慶長十
一年年御曲輪外え罷出、三ヶ所え引分ヶ被_二仰付_一、

只今之處ニ罷在候。此節此所村々ニてまはらニ家居御座候所、段々町屋ニ取立宿町ニ罷成候由承伝申候。其節より大伝馬町南伝馬町は道中筋御用、小伝馬町ハ江戸廻リ之御用と相分り申候由承伝申候。

一、大伝馬町南伝馬町小伝馬町と名付ケ申候儀は、御曲輪外ニ罷出候節より申習シ候由承伝申候。

一、御曲輪内ニ罷在馬繼仕候節は、只今之大伝馬町南伝馬町ハ宝田村、小伝馬町は千代田村と申候由、承伝申候。

右之通ニて御座候。以上。

享保十一年午八月

五人連 名⁽²¹⁾

江戸開府以前の古町であつた大伝馬町と南伝馬町は、江戸時代にいたり、半月交代で無償の人馬提供・書状通送と賃伝馬提供とを行い、小伝馬町は江戸市中の伝馬御用をつとめた。⁽²²⁾

寛政三年（一七九二）に、寛政の改革による町費節減策の一環として録上を命じられ、南伝馬町二丁目が提出した町入用の書上の内、臨時入用の項目に「一、九兩二分 天王祭礼并神箸社藏修復入用共」⁽²³⁾、南伝馬町一丁目の臨時入用の項目に「一、金九兩一分二朱ト八貫五百文 天王祭礼諸入用并拜殿神具幟修復建同仕廻竿堀出シ諸入用共」⁽²⁴⁾と

各町が書上げている。

また両伝馬町は、神田祭と山王祭の神輿行列にも国役として奉仕した。神輿昇をはじめ、獅子頭持、御幣持（幣帛）、大拍子持（大拍手）、面かぶり（鼻高面）をつとめたが、神田祭の場合、一の宮神輿と二の宮神輿の行列それぞれを両町が毎回交代で奉仕している。さらに両伝馬町は神田祭と山王祭で、大伝馬町は一番・諫鼓鶏の山車を、南伝馬町は二番・御幣に猿の山車という山車の先頭をつとめた。なぜ先頭をつとめたかを大伝馬町名主・馬込勘解由は以下のように記している。

一、私町内吹貫一番ニ相勤候儀、御祭礼被ニ仰付ニ候砌、御伝馬役相勤候町故被ニ為ニ仰付ニ候由、尤被ニ為ニ仰付ニ候年月は相知不レ申候得共、御曲輪内ニ罷在候節より相勤来申候、概四拾三年以前根津権現御祭礼被ニ仰出ニ候節も、一番ニ同様之吹貫差出、諸事山王同様ニ相勤申候、大伝馬町之儀は、古町之内ニモ御曲輪内ニ罷在候節之古町ニ而、諸事御役等も古相勤候故、一番ニ被ニ仰付ニ相勤来候儀と奉レ存候、以上、⁽²⁵⁾
(以下略)

古町であるがゆえ、そして御伝馬役という国役を勤めているゆえに、大伝馬町は神田祭、山王祭として一度だけ行われた根津権現祭礼の一番山車をつとめることとなったと

考えている。

さらに両伝馬町及び小舟町は、神輿が一時留まる場所でもあった。神田祭において神輿が一時留まる場所は、江戸城内の大手御橋及び神田橋御門近くの神田明神旧跡地、そして両伝馬町と小舟町であった。大伝馬町では名主・馬込勘解由宅で神主・社家・警固・借侍・供中間らに赤飯・煮染が振舞われ、神輿供奉・長柄持・神馬牽にも赤飯・煮染が配られた²⁶⁾。

大伝馬町持牛頭天王社の天王祭は、毎年六月五日から八日まで行われた。文化十二年（一八一五）十一月に大伝馬町名主・馬込勘解由が書いた書上によると「大伝馬町天王社往古より神田明神二而元和年中之頃より神事等相極候由其以前神事起源之儀者旧記不相見²⁷⁾」とあり委細は不明であるが、ただ神事に用いる獅子頭には寛永元年（一六二四）と書かれているという。

「神田明神地誌調」（『寺社書上』）によると、以下の巡行路が記載されている。

一 祭礼六月五日神輿出社道筋、湯島壱丁目通り筋違御門、須田町通り新石町左り江小柳町、紺屋町代地、平永町、柳原岩井町辺、富山町、お玉カ池辺、紺屋町分不残、今川橋二而御休、夫より塗師町通り松下町、鎌倉町辺、同川岸通り本銀町より河岸通り常盤橋御門

御橋江神輿奉居奉幣有之夫より本町大伝馬町同新道通り御仮家江御着²⁸⁾（句読点は筆者による）

六月五日に神輿が神田明神から宮出され、筋違橋御門をくぐり今川橋で休む。その後、常盤橋御門の橋上で神輿を奉居し奉幣、町々をめぐり大伝馬町二丁目の御仮家に至る。七日に御仮家・仮殿で三座神楽が神田明神社家により奉仕され、八日に神輿は御仮家を出て町々を通って神田明神境内の牛頭天王社に帰社した。当日の様子は『東都歳事記』によると、

家々冷索麵を以て客を饗す。或は戸外に竹を植、又は篠に扇をつけて軒にいだし、夜に入れば軒挑灯を燈す。町々木戸へ忌竹を立、大幟大行燈飾物等おひたゞしく、神酒所と名づけて往還に家台を儲け、神号を掛けて供物をさゝぐ。参詣の貴賤わくがごとくにして、街の繁昌さらに筆舌に及ぶべからず²⁹⁾。

と大盛況であったことがうかがえる。「神田明神地誌調」（『寺社書上』）を参考に『東都歳事記』で補いつつ、大伝馬町持天王祭の巡行路を作成したのが図2-1、2-2である。日本橋の大伝馬町周辺の町々の他に、神田の町々も巡行して、さらに常盤橋上で神輿奉居と奉幣をしているところが特徴である。

小舟町持牛頭天王社の天王祭は、毎年六月十日から十三



図 2-1



図 2-2

大伝馬町持牛頭天王社天王祭巡行路

日まで行われた。もともとは小伝馬町持により祭礼が行われていたが、寛文六年（一六六六）より小舟町持となった。

一 小舟町天王
神輿獅子頭鉦
四神共

右者往古小

伝馬町二而

神事有之候

所寛文六丙

午年ち小舟

町江引渡夫

ち年々神事

有之候（以

下略）

どうして小伝馬町持から小舟町持になったのかにつ

いて、『守貞謄稿』では「この天王の旅処、昔は小伝馬町なり。正徳中、疫病を祓はんため、これを借り遷し、以来恒例となりて、長く小舟町に神輿を置き、これを祭りて小伝馬町に復せず。」と、その経緯を記している。

小舟町持牛頭天王社の天王祭の巡行路は「神田明神地誌調」（『寺社書上』）によると以下のような道筋であった。

一 祭礼六月十日神輿出社道筋、湯島壺丁目通り筋違御門、須田町通り、十軒店ち左り江本石町、鉄炮町、小伝馬町、馬喰町通り、同附木店、橋本町辺、浅草御門内通り柳橋辺、米沢町、両国広小路二而御休、夫ち横山町、若松町、久松町通り塩町ち竹河岸、岩井町、亀井町辺、小伝馬町薬師堂前二而休、但自身番二而御職執行、夫より小伝馬町辺大門通り元浜町、長谷川町辺、新和泉町、新道、葺屋町、堺町、甚左衛門町、元大坂町、銀座稲荷堀二而御休、夫ち小網町、堀江町辺、堀留本町、裏河岸、伊勢町通り本船町辺、日本橋針店、品川町、宝町、小田原町より堀留、小船町、新道通り、照降町、小船町御仮家江御着（句読点は筆者による）

六月十日に神輿を宮出し、筋違御門を入り、小伝馬町薬師堂前で休憩、この時に自身番で御祓を執行した。その後、町々を巡行し銀座稲荷堀で休みを入れ、小舟町一丁目の御



図 3—1



図 3—2

小舟町持牛頭天王社天王祭巡行路

仮家に到着。十二日に御仮家・仮殿で五座神樂が神田明神社家により奉仕され、十三日に神輿は御仮家を出て町々を通って神田明神境内の牛頭天王社に帰社した。『東都歳事記』には、小舟町御仮屋周辺の当日の盛況ぶりを以下のよう⁽³²⁾に記している。

御旅出の間賑ひことに勝れたり。小舟町往還に行燈の如くなる楼門をたて、夜々燈火を点す。此事正徳

の頃より始めりと。其外大行燈挑灯をかゞやかし、夜の光景言語の及ぶ所にあらず⁽³³⁾。

図 3—1、3—2 は「神田明神地誌調」(『寺社書上』)と『東都歳事記』を参考に作成した小舟町持牛頭天王の天王祭の巡行路である。三社の中で最も多くの町々を巡行したため、御仮屋に到着するのが例年深夜さらに暁にまで及んだという。

南伝馬町持牛頭天王社の天王祭は、慶長十八年(二六一三)六月七日よりはじまり、毎年六月七日から十四日まで行われた。文化十二年(一八一五)十一月の南伝馬町名主・高野新右衛門の書上によると、

一慶長十八丑年六月七日

御本丸大手江天王神輿ヲ名主新右衛門并町人共持参仕神主奉幣有之、夫左町御奉行土屋権右衛門様、米津勘兵衛様江持参神酒御備、夫右江出南伝馬町中程江旅仮家建居置、神事同月十三日迄執行有之、同十四日帰社ニ御座候⁽³⁴⁾(以下略、句読点は筆者による)

「神田明神地誌調」(『寺社書上』)によると巡行路は以下の通りである。

祭礼六月七日神輿出社道筋、湯島壱丁目通り筋違御門、須田町通り本町式丁目より常盤橋御門江入、大手御門橋江神輿奉居奉幣有之、夫右御作事定小屋前通り常盤



図 4-1



図 4-2

南伝馬町持牛頭天王社天王祭巡行路

橋御門通り北町奉行所玄関江神輿奉居奉幣有之、土手通り南町奉行所前同断、夫より呉服橋江出、西河岸、四日市、新場、夫日本橋向通り町通り京橋辺、夫江御飯家江御着⁽³⁵⁾(句読点は筆者による)

六月七日に発興、筋違橋御門を入り町々を通り、常盤橋御門より江戸城内曲輪内へ入り大手御橋上に神輿を奉居し奉幣が行わ

れた。北町奉行所及び南町奉行所玄関口でも神輿が奉居され奉幣が行われた。その後、町々を通り京橋に至り、引き返して神輿は南伝馬町二丁目の御飯家に到着。十一日に御飯家で三座神楽が神田明神社家により奉仕され、十四日に神輿は御飯家を出て町々を通って神田明神境内の牛頭天王社に帰社した。

大伝馬町持、小舟町持牛頭天王社の天王祭とは異なり、江戸城内曲輪内に神輿が入って奉幣が行われたのは、この南伝馬町持牛頭天王社の天王祭のみであった。祭礼日数も八日間と、大伝馬町持が四日間、小舟町持が四日間であるのに対して圧倒的に多かったりするなど、他の三社の中でも特に重要視されたことがうかがえる。

『東都歳事記』をもとに作成した南伝馬町持牛頭天王の天王祭の巡行路が図 4-1、4-2 である。

三、明治時代以降の牛頭天王社と天王祭

江戸の牛頭天王社は、明治時代になり、明治元年（一八六八）三月二十八日「仏語ヲ以テ為ス神社ヲ改メ社前ニ佛像仏具アル者ハ之ヲ除却セシム⁽³⁶⁾」と太政官より仰せ渡され、仏語であった牛頭天王という名称から、それぞれ八雲神社や須賀神社、八坂神社など、ご祭神・素戔鳴尊にちなんだ神社名に改称した。小柄原牛頭天王は素戔鳴神社飛鳥神社

合殿⁽³⁷⁾（合社）、品川牛頭天王は北品川神社、浅草御蔵前牛頭天王は須賀神社、橋場牛頭天王は石浜神社末社・八雲神社⁽³⁹⁾、四谷天王稲荷は須賀神社と改称した。⁽⁴⁰⁾

神田明神末社・牛頭天王三社は明治元年六月に、大伝馬町持牛頭天王社と小舟町持同社は八雲神社、南伝馬町持牛頭天王社は須賀神社に改称され、末社から摂社へと変更された。三社ともご祭神は、建速須佐之男命（素戔鳴尊）とされた。⁽⁴¹⁾この時、神田明神は神田神社に、江戸山王権現社は日枝神社にと、東京の各神社も名称を変更した。

この牛頭天王三社の中で須賀神社は、明治時代以降、特に変転を繰り返した神社であった。

同四年七月四日、神社の氏子区域画定に関わる「郷社定則」（太政官布告第三三二）と「大小神社氏子取調規則」（太政官布告第三三二）が布告された。さらに翌年「氏子町名同人員帳」が作成され、東京府の神社において一町一神社を原則とする氏子区域がほぼ画定された。

神田神社は「氏子町名同人員帳」によると、神田区と日本橋区、下谷区と麴町区の町々を氏子区域としたが、おおよそ江戸時代の氏子町に、武家屋敷や藩邸が町地化した町々―神田においては表・裏神保町、猿樂町、錦町、美土代町、淡路町など、日本橋区では浜町、蛸殻町など―が新たに加えられた。この氏子区域の画定は、神田神社はじめ

府県郷社社にとつて、非常に重要な意味を持つてくることになる。なぜならば、最終的に神社の運営費及び祭祀執行料、神職俸給が、氏子を中心とする「人民の信仰」に委ねられることになるからである。⁽⁴²⁾

氏子区域画定の時、大伝馬町と小舟町は神田神社の氏子町となり、南伝馬町は日枝神社の氏子町となった。この時期の須賀神社の天王祭は、南伝馬町持による祭礼が踏襲された。

同九年の須賀神社の天王祭では、神輿は暁に神田神社を発興して須田町、通新石町、神田鍋町、鍛冶町、金吹町、本町一丁目を通り、日本橋を渡って南伝馬町をはじめ呉服町、青物町、平松町、佐内町、元大工町、川瀬町、松物町、箔屋町等を通って、南伝馬町（中橋）の御飯屋へ渡御した⁽⁴³⁾（図5）。翌年は神輿修繕中につき、道筋は縮小され日本橋から京橋にいたりすぐに御飯屋に入ることとされた。⁽⁴⁴⁾

同十八年二月十三日、小舟町持八雲神社とともに須賀神社の社殿が火事で焼失、神霊は神田神社本殿に仮に遷されて相殿として祀られた。同年十二月、須賀神社から古称であった江戸神社に名称を戻すことを神田神社神職と氏子総代連名で東京府へ願ひ出された。

（前略）南伝馬町八当時日枝神社ノ氏子地タルヲ以テ、右須賀神社再築ヲ欲セス、移転等ノ儀申出候へ共、

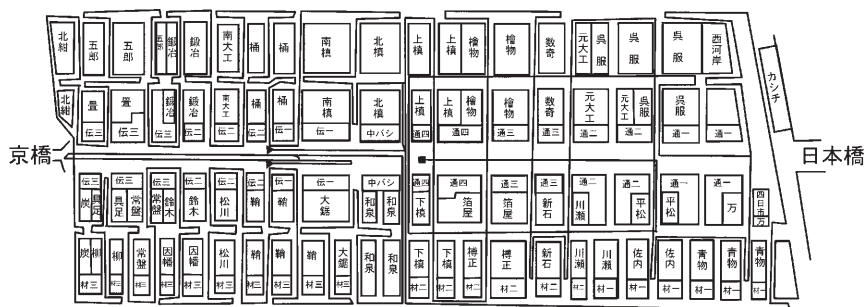


図5 明治9年須賀神社天王祭巡行路（『祭典開帳境内観物小屋掛奉納 明治九年 社寺科』（東京都公文書館蔵）をもとに作成）

古来当社二深遠ノ由縁有之社宇ヲ今更他へ移転スルハ神慮ニ対スルモ甚之ヲ安ンセス、既ニ去ル七月中御下問ニ応シ及上申候通り有之候。依テ氏子総代共迄協議候処、素ヨリ当社ノ撰社タル上ハ如何様ニモ負担尽力再築可致候へ共、前記ノ通江戸神社ノ旧称有之上ハ此際ヲ以テ可相成候上ハ年月ヲ遂テ江戸ノ地名モ消滅ニ属スヘク是亦遺憾ナキ

二非ス。右社号ニ其地名ヲ存スルハ両全ニモ可有之ニ付、旁此際右須賀神社ヲ以テ江戸神社ノ旧称ニ復シ度、一同希望ノ旨申出候⁽⁴⁵⁾（以下略、句読点は筆者による）。

その後、正式に江戸神社に改称された。

一方、同十八年十二月、日枝神社の氏子町となった南伝馬町の人々は、須賀神社を日枝神社へ遷座させようと神田神社へ協議したが、神田神社側より撰社を別の神社へ動座させることは恐れ多いとの申出があり断られた。そこで南伝馬町の人々は、今度は京都の八坂神社の分霊を日枝神社の祓所に奉祀したい旨の願書を八坂神社の承諾書を添えて東京府に願ひ出たが、結局聞き届け難いとして退けられた⁽⁴⁶⁾。その後、同年七月、同社末社猿田彦社内に、南伝馬町持牛頭天王つまり江戸神社の分霊を遷座して八坂神社という社名で相殿神として祀られた⁽⁴⁷⁾。

南伝馬町が日枝神社の氏子町になり同社に八坂神社が祀られた後、天王祭は日枝神社末社八坂神社の祭礼として南伝馬町の人々により行われた。同二十年六月、八坂神社の天王祭の年であったが日枝神社の山王祭と重なってしまったので、この年より隔年に行うこととされ、さらに翌年六月、御旅所を年番持で町々が担当することになった⁽⁴⁸⁾。同三十五年六月八日付『東京朝日新聞』に、六月九日より十二日まで末社八坂神社の祭礼が行われるという記事が掲載さ

れた。

●中橋八坂神社の祭礼

昨日より来る十二日まで六日間京橋区中橋の天王の祭礼なれば昨晩二時頃より十八ヶ町の大若小若の面々神田明神より神輿を昇き出し南伝馬町二丁目一番地角の飯屋へ納めたるが本日よりハ白丁の人夫をして神輿を昇かしめ各町内を渡す筈にて（中略）同所の神輿ハ先年焼失後神田明神より借り来るを例とありしが本年ハ新調し度しとの相談起り凡そ千円の予算を立て氏子十八ヶ町へ交渉中のよし⁽⁴⁹⁾

明治時代、南伝馬町持牛頭天王社は、神田神社摂社・江戸神社と日枝神社末社・八坂神社とに分かれ、神田神社では六月七日を例祭日として江戸神社神前で神事を行い、南伝馬町は八坂神社の祭礼として天王祭を行うという現象が起こった。さらに八坂神社では神田神社から神輿を借用したり、日枝神社から神輿を借用したりした。⁽⁵⁰⁾

ちなみに明治以降、品川神社、荏原神社、須賀神社（四谷）、神田神社摂社・小舟町八雲神社、千住八坂神社（素盞鳴神社飛鳥神社合殿（合社））など各社の天王祭も祭礼ごとに新聞で報じられ、天王祭が盛況であったことがわかる。⁽⁵¹⁾ 平出鏗二郎『東京風俗志』上の巻（明治三十二年刊）に「須賀神社には古へより神輿昇ぎの暴々しきを以て誇る所

たり。⁽⁵²⁾」と賑やかな神輿担ぎが行われていたことが記されていた。

四、大正十年の江戸天王祭

神田神社の摂社・江戸神社は大正九年（一九二〇）に画期を迎えた。この年の冬、神田市場組合の五ヶ町が江戸神社社殿を再興しようとした時のことである。

去冬神田市場組合なる五ヶ町（多町二丁目、連雀町、佐柄木町、須田町、通新石町）にして該社殿の改築をば企図せるに際し、自から地の歴史と、人の意気とに適合せる、江戸神社々殿の再興を思ひ起ち、尚業祖尊崇の精神より、女神二柱命の祭神増加をもなしたるもの、即ち今日の江戸神社にして、その祭礼の真意義又茲に存と云ふべきなり。⁽⁵³⁾

この時、江戸神社に松尾稲荷神社、埴山毘売神、神大市比売命が合祀され、江戸神社が神田市場五ヶ町持となった。松尾稲荷神社は、神田多町二丁目七番地に古来より鎮座し神田市場の守護神と崇敬されていたが、明治六年一月神田神社の附属兼勤社（兼務社）となった。その後、二十八年に神田神社に遷座し神田神社末社となった。⁽⁵⁴⁾ 同七年九月には神輿が新調され、神田祭の日に神田市場で担がれたりもした。⁽⁵⁵⁾

大正十年、江戸神社になって以来、初めての天王祭が行われることになった。江戸神社の天王祭は江戸天王祭と称され、九月に以下の日程で行われることになった。

九月十一日午後二時 習礼（祭儀の打合せ）

十三日午後三時

歌人宣誓式（菟多字人が神前で祈禱を受け記念章を授与される儀式）

午後八時

宮鍵柴垣式（神輿庫を預かる宮鍵講により神輿が宮出しを行う儀式）

十四日午前一時

神輿奉安式

午前九時

列立式

午前十一時

神幸（神田市場御旅所まで神輿を奉遷）

十五日正午

御旅所祭典（御飯屋における神事・神楽奉奏）

十六日

神輿渡御（神田市場の壮丁により神輿が奉昇され市場内を巡行）

十七日午前一時

神輿還御式

午後五時

神輿納庫⁵⁶⁾

神田市場主催で市場の全ての営業を休業して行われたこの江戸天王祭の目的は『神田市場史』によると「神田明神

よりも古い、江戸という土地の産土神である江戸神社の氏子を強調することによって江戸―東京における最も古い由緒ある市場ということを前面に押し出す効果を期待したのである。」⁵⁷⁾という。

この江戸天王祭の祭礼行列は、江戸時代、明治時代の天王祭の行列とはかなり違ったものであった（表2参照）。大正十年九月十四日の神幸の行列では、江戸神社の神輿の他に佐柄木町の町神輿二基や木綿籠、風流傘や金幣銀幣などが行列に加わったが、中でも菟多字人という行列が特殊であった。

菟多字人は童謡を謡う童男童女からなる行列で、童男童女は神田市場五カ町の十歳前後の子供たちであった。童謡は『江戸祭の唄』といい、作詞が野口雨情、作曲が本居長世であった。⁵⁸⁾菟多字人による童謡は、九月十三日の菟多字人宣誓式、十四日神輿出御、御旅所着御、十五日朝夕供饗、十六日朝夕供饗の時に奉奏された。その他、落語連や講武所芸妓連が加わったりした。

また多町の鍾馗、連雀町の熊坂長範、須田町の関羽、通新石町の歳徳神、佐柄木町の神武天皇の各山車や山車人形がそれぞれの町に備え付けられたりした（図6、7、8、9）。非常に盛大であったためか、大正十年九月十五日付『東京朝日新聞』で掲載された江戸天王祭が「秋雨に勢ふ

表 2 江戸神社祭礼行列比較表

江戸時代 南伝馬町持牛頭天王社

幣持 1 人
太鼓持 2 人
獅子頭 2 人
神輿 神輿舁 10 人
小旗 10 人
※町人
※名主高野新右衛門（羽織着馬乗）

『撰要集』起立之部二ノ下（国立国会図書館蔵）を参照。

明治 8 年 須賀神社

太鼓 3 人（白丁）
榊 4 人（白丁）
鉦 4 人（白丁）
太鼓 6 人（白丁）
獅子 2
幣帛 1 人（素袍）
神輿 舁丁 40 人（白丁）
神田神社祠掌 1 名（直垂）
瀬戸物町稲荷神社祠掌 森村正泰（直垂）

『祭典開帳境内観物小屋掛奉納 社寺科』明治 9 年（東京都公文書館蔵）を参照。

大正 10 年 江戸神社

第一列
列板（布衣）
警杖 走衆（陣鎌）（元賛）
警杖 走衆（陣鎌）（元賛）
音頭（半纏）
音頭（半纏）
綱手（號衣 12 人）
綱手（號衣 12 人）
催鼓 鼓手（罩甲）
音頭（半纏）
音頭（半纏）
木綿籠 神部（黄衣）
三貴鋒 舁丁（白張）
駒形 神人（褐衣）
駒形 神人（褐衣）
幸稻 舁丁（白張）
彩幣 神部（黄衣）
第二列
列板（布衣）
金幣 神部（黄衣）
金幣 神部（黄衣）
奇木 祭郎（騎馬）（小忌）
神輿 輿丁（華衣）
搦 持夫（白丁）
搦 持夫（白丁）
饌板 持夫（白丁）
供奉 神職（騎馬）（狩衣）
第三列
列板（布衣）
振鼓 神人（水干）
菟多字人 童男（千早）10 人
風流傘 神人（水干）
菟多字人 童女（千早）10 人
菟多長 直垂
菟多添 直垂 4 人
茶弁当 担夫（號衣）
合羽籠 担夫（號衣）
祭典委員
列係長
列係
撃柝夫
神部神人取締
附副

木村瑞枝『江戸天王祭』（江戸神社祭典会、大正 10 年）を参照。

神田祭り一とされるなど、神田祭と勘違いされて報道されたりもした。⁵⁹⁾

その後、明治大正を通じて江戸神社の社殿が再建されたか不明であるが、関東大震災後の昭和三年（一九二八）神田市場が秋葉原に移転された時、神田市場青年会が中心となって市場の円満な発展を祈念するため市場内に江戸神社を建立した。⁶⁰⁾同九年に江戸神社の神輿が神輿宮入している古写真が神田神社に所蔵されているが、おそらく同年に神輿が新調されたのであろう（図 10）。

神田神社の『社務日誌』によると、戦後、昭和二十五年

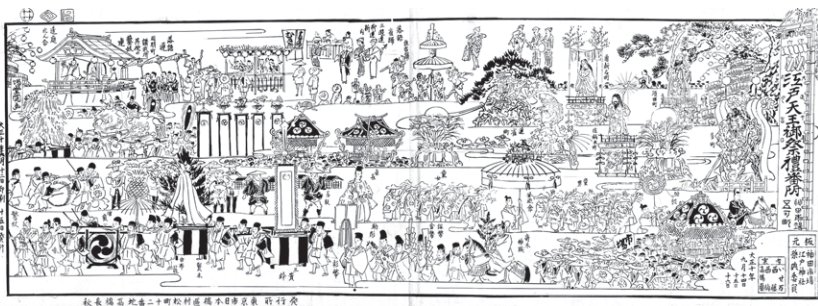


図6『江戸天王御祭礼番附』（神田神社蔵）



図8 神田市場に飾られた佐柄木町の神武天皇人形山車（現存、神田神社蔵）



図7 神田市場で担がれる江戸神社の神輿（神田神社蔵）

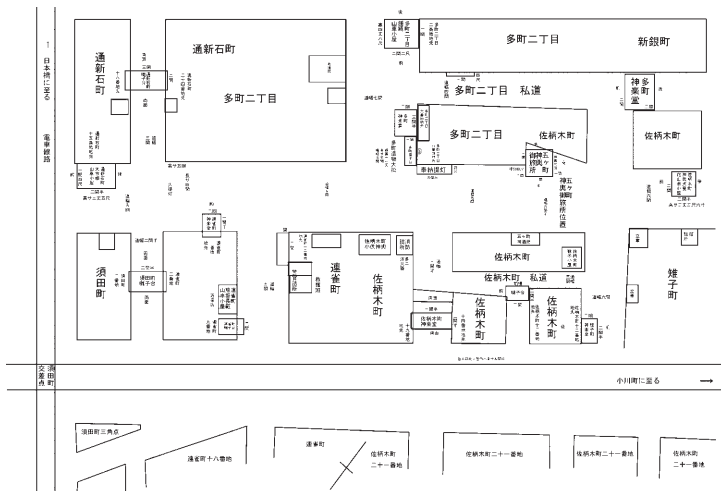


図9 神田市場御旅所周辺図（『江戸天王祭』をもとに作成）



図 11 現在の江戸神社の神輿（平成 27 年神田祭で撮影）



図 10 昭和 9 年神田祭における江戸神社の神輿宮入（神田神社蔵）

（一九五〇）十月一日、秋葉原の神田市場内に江戸神社が再建され、三十三年に鹿野喜平の手により神輿が完成し、同年五月に神田神社境内に江戸神社の神輿庫も竣功した。その後、平成二年十二月、神田市場が大田区に移転したため神輿庫を江戸神社の社殿にして神霊を遷座し、今に至っている。現在、二年に一度の神田祭で神輿宮入を行っている⁽⁶¹⁾。（図 11）。

むすびに代えて——町神輿の誕生

江戸天王祭が華々しく行われた大正時代は、あまり知られていないが東京が祭礼で盛り上がった時代であった。大正四年の上野東照宮三百年祭や同六年の十九年ぶりに行われた神田神社摂社・小舟町八雲神社の八雲祭、同八年の靖國神社五十年祭、同九年の神田神社末社・水神社の水神祭、同年の明治神宮鎮座祭などの奉祝祭をはじめ多くの祭礼の賑やかな様子が新聞などで報じられた⁽⁶²⁾。

また、大正時代は東京の祭礼の転換期でもあった。それは町神輿の誕生である⁽⁶³⁾。

東京の各神社の氏子町による町神輿が多く出されるようになった最初期の祭礼は、明治四十二年に行われた富岡八幡宮の深川八幡祭りであった。四十二年八月一四から一六日まで富岡八幡宮・深川八幡祭りは、永代橋墜落一〇〇年目の大祭として賑やかに行われることになった。この大祭では、氏子町による町神輿が大小合わせ六十一基出されることになり、各新聞でも大々的にとり上げられた⁽⁶⁴⁾。

（前略）

▲本日の神輿行列 各町内合せて六十一台の神輿は午前六時までに深川座前に集合し東黒江町の大獅子二台を先登に左の順序にて洲崎遊廓に練込み此処に中食の



図 13 大正 14 年 9 月佐久間町三丁目神輿渡御（個人蔵）



図 12 江戸天王祭で担がれた佐柄木町の町神輿（神田神社蔵）

上夫々仮舎に帰る
筈なるが左記各町
神輿の間には小若
連の神輿十八台を
も加へ更に殿軍と
して無数の樽神輿
が着く由なれば定
めし素破らしき盛
観を呈すべし
東黒江町、中島
町、上大島町、
下大島町、上蛤
町、半町、熊井
町、下蛤町、諸
町、黒江町、相
川町、福住町、
数矢町、富岡門
前町、平富町、
富吉町、東仲町、
佃町、元加賀町、
平野町、伊勢崎
町、木場町、亀

久町、扇横町、下木場町、鵜歩町、東大工町、仲大
工町、裏大工町、西大工町、佐賀町、材木町、小松
町、亀住町、万年町、和倉町、川口町、越前堀、湊
町、大川端、西平井町、仲町⁽⁶⁵⁾
大正四年十一月十四日にも深川八幡祭りで神輿三十九基
が担がれたりするなど、大正時代以降、町神輿の数が各神
社で増加していった。⁽⁶⁶⁾

同九年十一月の明治神宮のご創建奉祝として、千駄ヶ谷、
原宿、青山、渋谷、淀橋、幡ヶ谷といった周辺の町々より
二十五基の神輿が出され神宮外苑などで担がれた。⁽⁶⁷⁾ 明治期
に行われた憲法発布祝祭や寛都二十年祝祭などの奉祝行事
では町々より山車が引きだされていたが、大正時代に入る
と山車にかわり神輿が担がれるようになっていった。

神田神社の氏子町では、同十年に皆川町が神輿新始祭を
行っていたり、先に見た同十年の江戸天王祭では江戸神社
の神輿も当然新調だろうし、子供神輿と思われるが佐柄木
町の町神輿も制作された⁽⁶⁸⁾。また同十三年に作られ
た千社札の中に日本橋の両国米沢町の町神輿が描かれてい
たり、同十四年九月に佐久間町三丁目が町神輿を新調した
りした⁽⁶⁹⁾。同十五年に新調された現・神田末広町町
会の神輿は修復が行われつつ今もなお現存している。

表 3 は、江都天下祭研究会神田倶楽部『明神さまの氏子

とお神輿』（武蔵野書院、平成十三年）と林順信『江戸神輿春秋』《春の巻》、『同』《秋の巻》（大正出版、昭和五十八年）を参考にして、各神社の町神輿を一覧にしたものである。⁽⁷⁰⁾この表の分析や神輿制作の動機、変遷などについては、今後の課題にしたいと思う。

大正時代以降、神田神社や日枝神社では宮神輿に変えて鳳輦をつくり京都を手本とした古代的な行列を志向し、駕輿⁽⁷¹⁾も烏帽子に装束を着て静々と担ぐことが義務付けられた。その一方で、氏子町々はそれぞれ各町で町神輿をつくり、揃いの半纏あるいは浴衣姿で掛け声をあげながら賑やかに神輿をもみ担ぎするという形態を形作っていった。この鳳輦と町神輿という、江戸時代の神輿と山車そして附祭を中心とした行列とは違う、東京独自の新しい祭礼文化が大正時代に創造されていったのであった。

今後、この大正時代の町神輿の誕生に象徴される東京の祭礼の盛り上がりについて、三越百貨店による江戸文化の商品化による江戸趣味の流行⁽⁷²⁾、第一次世界大戦の特需による好景気とインフレによる消費文化の到来、御大典奉祝や奠都五十年祭などの奉祝行事や各種博覧会⁽⁷³⁾の開催などの諸要因も含め、どのようにして町神輿の祭礼が盛り上がったといったのか考察していくことが重要であろう。

表 3 町神輿一覧（稿）

	氏子町、氏子会	製作年	製作者
日枝神社	松物町町会	明治 43 年	不明
千住神社	千住一・二丁目町会	明治年間	不明
神田神社	小舟町八雲神社	大正 6 年	不明 ※『大正六年九月小舟町八雲祭』（個人蔵）
住吉神社	月島四之部町会	大正 6 年	後藤直光
三田春日神社	三田豊岡町	大正 6 年	不明
素戔雄神社	三ノ輪町会	大正 7 年頃	不明
神田神社	多町二丁目町会	大正 9 年	秋山三五郎か
小野照崎神社	元入谷町会	大正 10 年	宮惣
神田神社	江戸神社	大正 10 年頃	不明 ※『大正十年江戸天王祭写真帖』（神田神社蔵）
神田神社	佐柄木町 2 基	大正 10 年頃	宮惣 ※『大正十年江戸天王祭写真帖』（神田神社蔵）
浅草神社	西浅草二丁目（田島町）町会	大正 10 年頃	不明
駒込天祖神社	上動坂五三会	大正 11 年	大倉竹次郎
駒込天祖神社	宮元（神明町西）町会	大正 12 年	大倉竹次郎
小野照崎神社	北上野一丁目（万年町二丁目）町会	大正 12 年	鹿野喜平
神田神社	淡路町二丁目町会	大正 14 年	宮本重義
神田神社	佐久間町三丁目	大正 14 年	不明 ※『大正十四年九月記念祭礼御絵葉書 神田区佐久間町三丁目』（個人蔵）
神田神社	外神田三丁目末広町会	大正 15 年	だし鉄
神田神社	外神田三丁目末広町会	大正 15 年	だし鉄

神田神社	元佐久間町町会	大正 15 年	宮惣
代々木八幡神社	代々木富ヶ谷二丁目町会	大正 15 年	地元棟梁
富岡八幡宮	門前仲町二丁目町会	大正末期	後藤直光
素戔雄神社	河原崎町会	昭和初期	不明
富岡八幡宮	永代二丁目（北）町会	昭和初期	秋山三五郎
富岡八幡宮	牡丹二・三丁目町会	昭和初期	後藤直光
富岡八幡宮	箱崎四丁目町会	昭和初期	浅子周慶
鳥越神社	向柳原二丁目町会	昭和 3 年	宮松
鉄砲洲稲荷神社	新富町町会	昭和 3 年	不明
富岡八幡宮	福住町町会	昭和 3 年	秋山三五郎
駒込天祖神社	動坂睦（下動坂）	昭和 3 年	だし鉄
牛嶋神社	石原三丁目町会	昭和 3 年	牧野田由好
代々木八幡神社	代々木富ヶ谷二丁目町会	昭和 3 年	高橋
根津神社	東西千駄木町町会	昭和 3 年	宮惣
亀戸天神社	堅川（立川）四丁目町会	昭和 3 年頃	後藤直光
神田神社	小川町北部二丁目町会	昭和 5 年	秋山三五郎
神田神社	小川町北三町会	昭和 5 年	秋山三五郎
神田神社	小川町北三町会	昭和 5 年	岡田屋布施
神田神社	外神田五丁目元佐久町会	昭和 5 年	宮惣
神田神社	外神田五丁目元佐久町会	昭和 5 年	宮惣
駒込天祖神社	神明町町会	昭和 5 年	牧野田由好
根津神社	本郷肴町町会	昭和 5 年	宮松
七倉稲荷神社	池之端七軒町町会	昭和 5 年	後藤直光
神田神社	須田町一丁目南部町会	昭和 6 年	宮本重義
神田神社	錦町三丁目町会	昭和 7 年	宮惣
神田神社	神田猿樂町町会	昭和 8 年	後藤直光
神田神社	神田猿樂町町会	昭和 8 年	不明
神田神社	錦町二丁目町会	昭和 8 年	宮本重義
神田神社	錦町三丁目町会	昭和 8 年	宮惣
神田神社	鍛冶町二丁目町会	昭和 9 年	宮惣
神田神社	鍛冶町二丁目町会	昭和 9 年	宮惣
神田神社	神田須田町二丁目町会	昭和 9 年	浅子周慶
神田神社	岩本町二丁目岩井会	昭和 9 年	柏原甚吉
神田神社	岩本町二丁目岩井会 ※山車	昭和 9 年	柏原甚吉
神田神社	東神田豊島町会	昭和 9 年	宮惣
榊神社	新福富町（寿一丁目）町会	昭和 9 年	栗山五郎
亀戸天神社	緑一丁目町会	昭和 9 年	宮尾
芝大神宮	金杉川口町町会	昭和 9 年	後藤直光
芝大神宮	芝松本町町会	昭和 9 年	後藤直光
牛嶋神社	亀沢二丁目町会	昭和 10 年	金子光晴
牛嶋神社	亀沢三丁目町会	昭和 10 年	牧野田志賀
牛嶋神社	向島二・三丁目町会	昭和 10 年	金子光晴
神田神社	外神田四丁目目代会	昭和 11 年	だし鉄
神田神社	福材睦（旧福田町、材木町）	昭和 11 年頃	浅子周慶
下谷神社	仲御徒町三・四町会	昭和 11 年	宮本重義
神田神社	神田松枝町会	昭和 13 年	宮惣
神田神社	神田松枝町会	昭和 13 年	宮惣
神田神社	神田松枝町会 ※山車	昭和 13 年	宮惣
神田神社	神田大和町会	昭和 13 年	宮本重義
神田神社	室町一丁目会	昭和 13 年	後藤直光
神田神社	室町一丁目会	昭和 13 年	後藤直光
神田神社	小舟町町会	昭和 13 年	後藤直光

神田神社	神田須田町二丁目町会	昭和 13 年	宮惣
神田神社	岩本町三丁目町会	昭和 15 年	宮惣
神田神社	岩本町三丁目町会	昭和 15 年	宮惣
深川神明宮	高橋三丁目町会	昭和 15 年	後藤直光
神田神社	須田町北部町会	昭和 16 年	鹿野喜平
神田神社	須田町北部町会	昭和 16 年	鹿野喜平
素戔雄神社	諏訪町町会	戦前	不明
品川神社	北品川（品川陸）町会	戦前	不明
住吉神社	宮元町会	戦前	不明
住吉神社	月島一之部二之部町会	戦前	浅子周慶、不明
住吉神社	月島三之部町会	戦前	後藤直光
富岡八幡宮	中木場町会	戦前	後藤直光
富岡八幡宮	富岡一丁目（宮元）町会	戦前	後藤直光
葛西神社	南町町会	戦前	後藤直光
鉄砲洲稻荷神社	湊一丁目（宮元）町会	昭和戦前	浅子周慶
下谷神社	南稻荷町（宮元）町会	昭和戦前	後藤直光
湯島天満宮	天神町三丁目町会	昭和戦前	宮松
日枝神社	茅場町町会	昭和戦前	不明
富岡八幡宮	佐賀町町会	昭和戦前	後藤直光
神田神社	神田和泉町町会	昭和 25 年	宮惣
神田神社	昭和町会	昭和 26 年	不明
神田神社	久松町町会	昭和 26 年	不明
神田神社	小川町三丁目西町会	昭和 27 年	岡田屋布施
神田神社	司町二丁目町会	昭和 27 年	宮本重義
神田神社	司町二丁目町会	昭和 27 年	宮本重義
神田神社	内神田旭町町会	昭和 27 年	宮本重義
神田神社	内神田旭町町会	昭和 27 年	宮本重義
神田神社	多町一丁目町会	昭和 27 年	宮本重義
神田神社	多町一丁目町会	昭和 27 年	宮本重義
神田神社	佐久二平河町会	昭和 27 年	後藤直光
神田神社	佐久二平河町会	昭和 27 年	後藤直光
神田神社	大伝馬町一之部町会	昭和 27 年	関徳
神田神社	蛸殻町東部町会	昭和 27 年	浅子周慶
神田神社	浜町二町会	昭和 27 年	宮本重義
神田神社	東日本橋三丁目橘町会	昭和 27 年	不明
神田神社	神保町一丁目町会	昭和 27 年	宮本重義
牛嶋神社	両国一丁目町会	昭和 27 年	宮信
鉄砲洲稻荷神社	木挽町三丁目町会	昭和 27 年頃	後藤直光
富岡八幡宮	東陽一丁目町会	昭和 27 年頃	浅子周慶
神田神社	内神田美土代町会	昭和 28 年	宮本重義
神田神社	内神田美土代町会	昭和 28 年	宮本重義
神田神社	須田町中部町会	昭和 28 年	宮惣
神田神社	岩本町三丁目町会	昭和 28 年	宮本重義
神田神社	人形町一丁目町会	昭和 28 年	後藤直光
神田神社	東日本橋一丁目矢ノ倉町会	昭和 28 年	不明
神田神社	東日本橋一丁目村松町会	昭和 28 年	不明
神田神社	東神田三丁目町会	昭和 28 年	宮松
神田神社	鍛冶町一丁目町会	昭和 29 年	宮惣
神田神社	鍛冶町一丁目町会	昭和 29 年	宮惣
神田神社	北乗物町町会 ※山車	昭和 29 年	不明
神田神社	神田東紺町会	昭和 29 年	浅子周慶
神田神社	神田東紺町会	昭和 29 年	浅子周慶

神田神社	東神田町会	昭和 29 年	浅子周慶
神田神社	東神田町会	昭和 29 年	浅子周慶
神田神社	神田和泉町町会	昭和 29 年	宮本重義
神田神社	馬喰町一丁目三之部町会	昭和 29 年	浅子周慶
神田神社	浜町二丁目金座町会	昭和 29 年	不明
神田神社	浜町二丁目親合町会	昭和 29 年	不明
神田神社	中洲町会	昭和 29 年	不明
小石川簸川神社	西丸町会	昭和 29 年	浅子周慶
芝大神宮	宮元町会	昭和 29 年	浅子周慶
住吉神社	月島二号地町会	戦後 20 年代	浅子周慶
神田神社	小川町三丁目南部町会	昭和 30 年	宮本重義
神田神社	紺屋町北部町会	昭和 30 年	宮本重義
神田神社	富山町町会	昭和 30 年	後藤直光
神田神社	富山町町会	昭和 30 年	岡田屋布施
亀戸天神社	江東橋四丁目町会	昭和 30 年頃	鹿野喜平
牛嶋神社	本所一丁目町会	昭和 30 年代	宮信
神田神社	司一町会	昭和 31 年	宮本重義
神田神社	司一町会	昭和 31 年	宮本重義
神田神社	岩本町一丁目町会	昭和 31 年	浅子周慶
神田神社	浜町一丁目町会	昭和 31 年	後藤直光
神田神社	浜町三丁目東部町会	昭和 31 年	宮本重義
住吉神社	新佃島町会	昭和 31 年頃	宮本重義
神田神社	東神田豊島町会	昭和 32 年	浅子周慶
神田神社	東神田豊島町会	昭和 32 年	浅子周慶
神田神社	佐久間町三丁目町会	昭和 32 年	後藤直光
神田神社	佐久間町三丁目町会	昭和 32 年	後藤直光
神田神社	佐久間町四丁目町会	昭和 32 年	浅子周慶
神田神社	佐久間町四丁目町会	昭和 32 年	浅子周慶
神田神社	馬喰町二丁目町会	昭和 32 年	関徳
神田神社	馬喰町四丁目町会	昭和 32 年	関徳
熱田神社	吉野町町会	昭和 32 年頃	南部屋五郎右衛門
神田神社	錦町二丁目町会	昭和 33 年	宮本重義
神田神社	神田旅籠町会	昭和 33 年	南部屋五郎右衛門
神田神社	神田旅籠町会	昭和 33 年	南部屋五郎右衛門
神田神社	江戸神社（奉賛会）	昭和 33 年	鹿野喜平
神田神社	秋葉原町会（台東区）	昭和 33 年	宮本重義
神田神社	蛸一共和会	昭和 33 年	宮本重義
神田神社	浜町三西部町会	昭和 33 年	宮本重義
神田神社	蛸一町会自衛会	昭和 33 年か	不明
元三島神社	下根岸町会	昭和 33 年	後藤直光
神田神社	浜町二丁目西部町会	昭和 34 年	不明
日枝神社	西八丁堀二丁目町会	昭和 34 年	秋山三五郎
富岡八幡宮	深川二丁目北町会	昭和 34 年	宮本重義
日枝神社	西八丁堀三丁目町会	昭和 35 年	秋山三五郎
神田神社	外神田一丁目万世橋町会	昭和 35 年	宮本重義
神田神社	外神田一丁目万世橋町会	昭和 35 年	宮本重義
神田神社	宮本町会	昭和 35 年	宮惣
神田神社	神台会	昭和 35 年	宮信
神田神社	神台会	昭和 35 年	宮信
神田神社	外神田四丁目田代会	昭和 35 年	だし鉄
神田神社	外神田四丁目田代会	昭和 35 年	だし鉄
神田神社	東日本橋二丁目町会	昭和 35 年	宮本重義

神田神社	外神田三丁目金沢会	昭和 36 年	宮本重義
神田神社	外神田三丁目金沢会	昭和 36 年	宮本重義
神田神社	神田鍛冶三会町会	昭和 37 年	岡田屋布施
神田神社	神田鍛冶三会町会	昭和 37 年	岡田屋布施
神田神社	内神田鎌倉町会	昭和 38 年	宮本重義
神田神社	内神田鎌倉町会	昭和 38 年	宮本重義
日枝神社	平河町一丁目町会	戦後 30 年頃	宮本重義
神田神社	淡路町一丁目町会	昭和 40 年	宮本重義
神田神社	淡路町一丁目町会	昭和 40 年	宮本重義
神田神社	東日本橋三丁目橘町会	昭和 42 年	不明
浅草神社	公園町会	昭和 48 年	岡田屋布施
隅田稲荷神社	隅田三丁目西萬燈一の宮	昭和 50 年	地元有志
亀戸天神社	菊川二丁目町会	昭和 50 年頃	地元有志
神田神社	淡路町二丁目町会	昭和 52 年	宮本重義
神田神社	神田五軒町町会	昭和 52 年	宮本重義
神田神社	神田五軒町町会	昭和 52 年	宮本重義
浅草神社	象潟一丁目町会	昭和 52 年	中台神仏製作所・塩沢製作所
芝大神宮	宮元（大門）町会	昭和 52 年	大鉄
神田神社	外神田四丁目松富会	昭和 53 年	宮本重義
鳥越神社	浅草七軒町町会	昭和 53 年	鈴木金吉
神田神社	多町二丁目町会	昭和 54 年	志布景彩
神田神社	多町二丁目町会	昭和 54 年	志布景彩
神田神社	外神田五丁目栄町会	昭和 54 年	松村清作
神田神社	外神田五丁目栄町会	昭和 54 年	松村清作
素戔雄神社	南千住上町町会	昭和 54 年	小川政次
三崎神社	一神町会	昭和 56 年	小川政次
浅草神社	馬道一丁目町会	昭和 56 年	宮本重義
湯島天満宮	本郷春木町町会	昭和 56 年	鈴木金吉
牛嶋神社	業平一丁目町会	昭和 57 年	小川政次
神田神社	人形町二丁目三之部町会	昭和 60 年	鈴木金吉
神田神社	小川町連合	昭和 61 年	宮本重義
神田神社	東紺屋町会	戦後	不明
神田神社	横山町町会	戦後	宮本重義
神田神社	小伝馬町三之部町会	戦前	後藤直光
浅草神社	駒形二丁目町会	戦後	浅子周慶
浅草神社	花川戸二丁目町会	戦後	松村清作
浅草神社	仲見世町会	戦後	宮本重義
浅草神社	西浅草三北部町会	戦後	南部屋五郎右衛門
鳥越神社	小島二丁目東町会	戦後	鹿野喜平
鳥越神社	二長町町会	戦後	浅子周慶
三島神社	金杉上町（金杉一丁目）町会	戦後	宮本重義
高木神社	高木神社上睦	戦後	後藤直光
富岡八幡宮	越中島町会	戦後	宮本重義
富岡八幡宮	深浜	戦後	後藤直光
富岡八幡宮	下木場町会	戦後	宮本重義
富岡八幡宮	冬木町町会	戦後	浅子周慶
富岡八幡宮	三好三・四丁目町会	戦後	後藤直光
富岡八幡宮	木場五丁目町会	戦後	浅子周慶
三田春日神社	御本社神輿	戦後	宮本重義
牛嶋神社	両国二丁目松元会（小泉会）	戦後	宮本重義
白山神社	本郷六丁目赤門会	戦後	南部五郎右衛門
櫻木神社	上真砂町町会	戦後	後藤直光

神田神社	小伝馬町二之部町会	不明	後藤直光
亀戸天神社	菊川三丁目町会	不明	後藤直光
筑土八幡宮	神楽坂三丁目町会	不明	南部屋五郎右衛門
神田神社	神保町一丁目町会	不明	不明
神田神社	神田猿樂町町会	不明	不明
神田神社	岩本町一丁目町会	不明	不明
神田神社	蛸一共和会	不明	不明
神田神社	馬喰町二丁目町会	不明	不明
神田神社	馬喰町二丁目町会	不明	不明
神田神社	横山町町会	不明	不明
神田神社	東日本橋二丁目町会	不明	不明
神田神社	久松町町会	不明	不明
神田神社	浜町一丁目町会	不明	不明
神田神社	浜町二丁目西部町会	不明	不明
神田神社	浜町二町会	不明	不明
神田神社	浜町三丁目東部町会	不明	不明
神田神社	浜町三西部町会	不明	不明
神田神社	中洲町会	不明	不明
神田神社	神田同朋町会	平成 8 年	宮本卯之助
神田神社	紺屋町南町会	平成 11 年	飯田昭次郎
神田神社	神保町一丁目町会	平成 15 年	宮本卯之助商店
神田神社	東神田三丁目町会	平成 16 年	宮大工
神田神社	大手町・丸の内町会（将門塚保存会）	平成 17 年	宮惣
神田神社	神田須田町二丁目町会	平成 25 年	宮惣

註

(1)

斎藤月岑『江戸名所図会』（天保五年（一八三四）、同七年刊）と同『東都歳事記』（同九年刊）については以下の文献を使用した。市古夏生、鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会』1～6（筑摩書房、平成八年～九年）、朝倉治彦校注『東都歳事記』1～3（平凡社、昭和四十五年～四十七年）。

(2)

小池章太郎編『江戸砂子』東京堂出版、昭和五十一年、八三頁。

(3)

市古夏生、鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会』5、荒川区教育委員会、荒川区立ふるさと文化館『荒川区区制施行八十周年記念 平成二十四年度荒川ふるさと文化館企画展 山車人形が街をゆく』（荒川区教育委員会、荒川区立ふるさと文化館、平成二十四年）参照。

(4)

東京都市荒川区区役所『荒川区史』（東京都市荒川区区役所、昭和十一年）、朝倉治彦校注『東都歳事記』2、荒川区教育委員会、荒川区立ふるさと文化館『荒川区区制施行八十周年記念 平成二十四年度荒川ふるさと文化館企画展 山車人形が街をゆく』参照。

(5)

品川区教育委員会『品川区史料（六） 品川の天王祭』（品川区教育委員会、平成四年）参照。

(6)

前掲（5）に同じ。

(7)

朝倉治彦校注『東都歳事記』2、東京都品川区『品川区史』続資料編（二）（東京都品川区、昭和五十一年）、品川区教育委員会『品川区史料（六） 品川の天王祭』参照。市古夏生、鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会』5、『台東区の神社と祭り』東京都神社庁台東支部、東京都神

(8)

社庁台東区神社総代連合会、昭和五十八年）参照。

(9) 朝倉治彦校注『東都歳事記』2。

(10) 朝倉治彦校注『東都歳事記』2、市古夏生、鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会』5、荒川区教育委員会、荒川区立ふるさと文化館『荒川区区制施行八十周年記念 平成二十四年度荒川ふるさと文化館企画展 山車人形が街をゆく』参照。

(11) 『東都歳事記』2、『江戸御祭礼番附』（国立国会図書館蔵、『類集撰要』三十二（国立国会図書館蔵）、地誌御調書上』（文政十年十月、『寺社書上』四十四、四谷三、国立国会図書館蔵）等参照。

(12) 小池章太郎編『江戸砂子』、一七九頁。

(13) 『地誌御調書上』（『寺社書上』四十四）参照。

(14) 新宿近世文書研究会『町方書上 四谷町方書上』上（新宿近世文書研究会、平成十五年、東京都江戸東京博物館都市歴史研究室『江戸東京博物館史料叢書8 四谷塩町一丁目 人別関係補遺・近世祭礼篇』（東京都・財）東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館、平成十七年）参照。

(15) 牧田勲『江戸の神輿と領主法規制―神輿昇をめぐる法と無法―』（『京都市俗』第九号、平成三年十二月）参照。

(16) 喜田川守貞・著、宇佐美英機・校訂『近世風俗志（守貞謄稿）（四）、岩波書店、平成十三年、一二三頁。

(17) 牧田氏は、こうした天王祭での壮士などと呼ばれた神輿の担ぎ手を、鳶の者や駕籠舁、日本橋魚河岸の若衆や棒手振商人などといった都市下層民であったと推測している。本来であれば、両伝馬町が手配した白張つまり白丁

姿の人夫が神輿を担ぐところだが、各町壮年の男子がそれを奪い取り、採み合い型神輿舁つまりもみ担ぎを行った。これは幕末以降に顕著になっていったが、この担ぎ方は、天王祭において、逸脱行為であり、氏子民衆の娯楽的介入行為だと、牧田氏は論じている。さらに、天王祭に関しては、こうした逸脱行為を取締まる法令もなく、神社側も幕府も強いて排除せず、寛容な態度をとったため、もみ担ぎや町内渡しが定例化していったという（牧田勲『江戸の神輿と領主法規制―神輿昇をめぐる法と無法―』参照。

(18) 天王祭については「天王祭礼起立」（『撰要集』起立之部二ノ下）、国立国会図書館蔵、「神田明神地誌調」（『寺社書上 湯嶋神社書上、一、斎藤月岑・著、朝倉治彦・校注『東都歳事記』2参照。

(19) 「天王祭礼起立」（『撰要集』起立之部二ノ下）。

(20) 市古夏生、鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会』5参照。東京都『東京市史稿』産業篇第十二、東京都、昭和四十三年、六一六―七頁。

(21) 伝馬役については、東京都公文書館『元禄の町』（都史紀要二十八、東京都生活文化局広報広聴部情報公開課、昭和五十六年）、片倉比佐子『大江戸八百八町と町名主』（吉川弘文館、平成二十一年）参照。

(22) 伝馬役については、東京都公文書館『元禄の町』（都史紀要二十八、東京都生活文化局広報広聴部情報公開課、昭和五十六年）、片倉比佐子『大江戸八百八町と町名主』（吉川弘文館、平成二十一年）参照。

(23) 東京市役所『東京市史稿』市街編 第三十一、東京市役所、昭和十三年、一二三頁。

(24) 東京市役所『東京市史稿』市街編 第三十一、東京市役所、昭和十三年、五一頁。

(25) 『御伝馬方旧記』十三、『近世交通史料集』三、御伝馬方

旧記、五三三頁。

- (26) 両伝馬町と小舟町と、神田祭の神輿との関係については、拙稿「江戸後期における神田祭の神輿行列に関する一考察」(『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第二号、平成二十二年)参照。

- (27) 『撰要集』起立之部二ノ下。

- (28) 『神田明神地誌調』『寺社書上』湯嶋神社書上。

- (29) 朝倉治彦校注『東都歳事記』2、八五頁。

- (30) 『撰要集』起立之部二ノ下。

- (31) 喜田川守貞・著、宇佐美英機・校訂『近世風俗志(守貞謄稿)』(四)、岩波書店、平成十三年、一二三頁。

- (32) 『神田明神地誌調』『寺社書上』湯嶋神社書上。

- (33) 斎藤月岑・著、朝倉治彦・校注『東都歳事記』2、一〇三頁。

- (34) 『撰要集』起立之部二ノ下。

- (35) 『神田明神地誌調』『寺社書上』湯嶋神社書上。

- (36) 安丸良夫、宮地正人校注『宗教と国家』日本近代思想大系5、岩波書店、昭和六十三年、四二五頁。

- (37) 荒川区立荒川ふるさと文化館『あらかわ神社明細』(文化館ブックス3資料②、荒川区立荒川ふるさと文化館、平成十七年)参照。

- (38) 『台東区の神社と祭り』参照。

- (39) 前掲(37)に同じ。大正九年九月十三日、末社疱瘡神社を合祀し、八雲疱瘡神社と改称(石浜神社社誌編纂委員会『石浜神社社誌』石浜神社社務所、昭和五十年)。

- (40) 『神社明細簿・天・從第二大区至第六大区(社寺取扱・社寺掛)明治七年』(東京都公文書館蔵)参照。

- (41) 『神社明細簿・天・從第二大区至第六大区(社寺取扱・社寺掛)明治七年』(東京都公文書館蔵)、『神田神社明細帳 附 附属神社明細帳』(明治二十五年、神田神社所蔵)参照。

- (42) 拙稿「東京寛都と神田祭—明治初年の神田祭の変遷を素描する—」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十六号、平成二十一年)、同「神田神社境内の変遷と神田祭—祭祀・祭礼空間の持続と変容—」(藤田大誠、青井哲人、畔上直樹、今泉宜子『明治神宮以前・以後—近代神社をめぐる環境形成の構造転換』鹿島出版会、平成二十七年)参照。

- (43) 『祭典開帳境内観物小屋掛奉納 明治九年 社寺科』(東京都公文書館蔵)参照。

- (44) 『邸内社堂綴込 明治十年 社寺科』(東京都公文書館蔵)参照。

- (45) 『回議録 創建移転参拝社寺改称 社寺部』(明治十八年、東京都公文書館蔵)。

- (46) 『明治十九年 普通第一種 願何届録 創建移転改称廃合 庶務課社寺掛』(東京都公文書館蔵)、『閣省指令録補遺 自 明治十一年 至 明治十九年』(東京都公文書館蔵)参照。

- (47) 現在、日枝神社の由緒板には「日枝大山咋神の祖父神、もと京橋南伝馬町の牛頭天王として、三ヶ町の鎮守で大伝馬町、小舟町と並び江戸三天王と称された。明治十九年七月、末社猿田彦神社内に相殿神として奉斎された。今に祇園八坂信仰は商業・農業の守護神、病氣退散の信仰が篤い。」とある。

- (48) 『読売新聞』明治二十年六月五日、『同』明治二十一年六月九日参照。
- (49) 『東京朝日新聞』明治三十五年六月八日。
- (50) 前掲(48) (49) と同じ。
- (51) 『東京朝日新聞』明治二十三年六月十三日、同十八日、『同』明治二十四年八月二日、『同』明治二十五年五月二十九日、同六月二日、同四日、『同』明治三十一年五月十二日、『同』明治三十一年六月十三日など参照。
- (52) 平出鏗二郎『東京風俗志』上、筑摩書房、平成十二年、二二七頁。
- (53) 木村瑞枝『江戸天王祭』多町二丁目連雀町佐柄木町須田町通新石町雉子町祭典会、大正十年、三頁。
- (54) 『神田神社明細帳 附 附属神社明細帳』、木村信嗣「神田神社」(『将門関係書類』十三、流通経済大学図書館祭魚洞文庫蔵) 参照。
- (55) 社団法人神田市場協会、神田市場史刊行会『神田市場史』上巻(社団法人神田市場協会、神田市場史刊行会、昭和四十三年) 参照。
- (56) 前掲(53) と同じ。
- (57) 社団法人神田市場協会、神田市場史刊行会『神田市場史』上巻、七八一頁。
- (58) 本居長世『江戸祭の唄』(民衆文芸社、大正十年) 参照。
- (59) 『東京朝日新聞』大正十年九月十五日参照。
- (60) 『東京市公報』昭和三年十二月十一日参照。
- (61) 平成二十七年神田祭・神輿宮入で、現在の江戸神社の神輿が宮入りしている動画は以下のサイトで見る事ができる。インターネットTV神田祭。ch <<http://www.kandamyoujin.or.jp/kandamatsuri/youtube/youtube2.html>>。

- (62) 青木宏一郎『大正ロマン 東京人の楽しみ』(中央公論新社、平成十七年) 参照。
- (63) 町神輿が制作されるようになっていく前に、明治三十年代ころより薦包みの酒樽を神輿風に飾り付けた樽神輿が流行し、その後、子供神輿も徐々に作られていくようになり、さらに町神輿へと変遷していったと推測する。拙稿「神田神社境内の変遷と神田祭―祭祀・祭礼空間の持続と変容―」(藤田大誠、青井哲人、畔上直樹、今泉宜子「明治神宮以前・以後―近代神社をめぐる環境形成の構造転換」) 参照。また樽神輿から子供神輿、町神輿への変遷については、亀川泰昭氏と山瀬一男氏よりご教示を受けた。
- (64) 『東京朝日新聞』明治四十二年八月十一日、『読売新聞』明治四十二年八月十一日、八月十四日、八月十五日参照。
- (65) 『読売新聞』明治四十二年八月十五日。
- (66) 『読売新聞』大正四年十一月十四日参照。
- (67) 『読売新聞』大正九年十一月六日、『東京朝日新聞』大正九年十一月六日参照。
- (68) 『神田神社年中行事 大正九年一月―一二年四月』(神田神社蔵、『江戸祭礼集(千社札張込帖)』(神田神社蔵)、『大正十年江戸天王祭写真帖』(神田神社蔵) 参照。
- (69) 『大正十四年九月 記念祭礼絵葉書 神田区佐久間町三丁目』(個人蔵、江都天下祭研究会神田俱樂部「明神さまの氏子とお神輿」(武蔵野書院、平成十三年) 参照。
- (70) 戦後の出版物を参考としているため、戦後以降の制作が

目立ち、大正時代、昭和戦前期に制作の神輿の記録が少ないことは否めない。

拙稿「神田神社境内の変遷と神田祭―祭祀・祭礼空間の持続と変容―」（藤田大誠、青井哲人、畔上直樹、今泉宜子『明治神宮以前・以後―近代神社をめぐる環境形成の構造転換―』参照）。

国立歴史民俗博物館、岩淵令治編『歴博フォーラム 民族展示の真構築―「江戸」の発見と商品化―大正期における三越の流行創出と消費文化―』（岩田書院、平成二十六年）、神野由紀『百貨店で〈趣味〉を買う 大衆消費文化の近代』（吉川弘文館、平成二十七年）などを参照。

前掲（62）と同じ。

（神田神社権禰宜）